

セブ島に学ぶ

東洋大国際地域学部研修から

* 2 *

報告者

国際地域学科 宇佐美 真弓(2年)

同 手塚 詩織(2年)



手塚 詩織さん



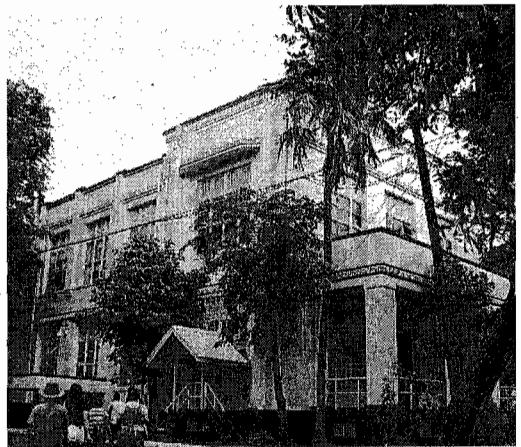
宇佐見真弓さん

疑問や意見 英語で

講義など通じ学生と交流

期待と不安
フィリピン大学はマニラ校、ミンダナオ校、ロスバニョス校、バギオ校など国内に10のキャンパスを持つ国立大

学です。法学、医学、政治学、人文社会学などさまざまな分野の教育を行っています。今回のワークショップではセブ校で「コミュニティ開発と都市の貧困問題」に即した内容の講義を受けました。コミュニティ開発とは、コミュニティ(地域)の住民が、特定の問題やニーズに対して目標を設定し、その解決のために集団で行う活動です。特に貧しいコミュニティに住む人々がその意思や権利を訴えるには、団結して問題解決に取り組むことが大切であり、セブ市では行政やN



100年の歴史を感じさせるフィリピン大学セブ校の校舎



英語による講義を熱心に受ける学生たち

GOが彼らの組織化を支援しています。この種の草の根の開発で強調されるのは住民参加であり、人々の意思に沿った開発を行うべきであると考えられます。

貧困、都市開発、ジェンダーなどの専門家が、私たちに興味深い講義をしてくれました。日本の大学で受けるのはまた違った環境の中で、どんな話が聴けるのだろうかという期待と、ちゃんと理解できるだろうかという不安がありました。

新たな魅力

それぞれの講義は英語で行われ、普段聞きなれない専門用語もでてきましたが、まずは自分の耳と目で理解できる

ように、メモを取ることももちろん、授業中はいつもにも増して集中して聴いていたように思います。宇佐見教授による日本語での要約が、私たちの理解を助けてくれました。

講義は全部で9つ受けました。セブ市の職員やフィリピン大学教授、女性団体の代表者など多彩な講師陣が内容の濃い講義をしてくれました。「セブ市の概要」、「貧困の定義」、「都市計画とコミュニティ開発」、「ジェンダーとガバナンス」など、さまざま観点からセブ市の貧困問題と開発を学びました。東洋大学からは、宇佐見教授と3年生のグループが「フェアトレードを通してみる日本とフィリピンの関係」についてプレゼ

ンテーションを行いました。フェアトレードの日本での現状を、フィリピンの女性や少数民族が作った商品を通して紹介したので、セブ校の教授や学生さんからも質問やコメントがたくさん出ました。講義中は、常に理解を深めようと、疑問や意見を英語で講師に伝えました。講師のみならず全真剣に答えられたので、それがまたやる気や自信につながっていききました。現地の学生と同じ講義を聴き、時間を共に過ごすことで、意見交換することもできました。このような授業は日本ではなかなかできないことです。フィリピン大学の授業環境はとても心地よく、私たちにとって貴重な体験になりました。講義を受けた後は、セブの町をまた違った角度で見ることができ、新たな魅力を見つけた気がします。そして講義で学んだことを受けて、後日私たちはグループごとにフィールドワークを行

いました。貧困と格差
宇佐美が一番興味をもった講義は、セブ市の行政官ビンボー・フェルナンデス氏の「都市計画とコミュニティ開発」です。セブ市では多くの貧困層が存在しますが、それを改善するために政府だけでなく、NGOや住民組織の相互協力が進んでいます。貧困をなくそうと思つたら、そこに住む人々が自らを組織化し、行動していくことが不可欠だということを学びました。貧困の解決とは、政府の一方的な援助でどうにかするものだと思つていましたが、実際に貧しい暮らしを強いられる人々が団結して問題に立ち向かっていくことが重要であり、それがコミュニティ開発の原点なのだと理解できました。

手塚が面白いと思ったのは、フィリピン大学のマリア・パレスカス教授(通称チェリー先生)の講義です。今回の研修のコーディネーターでもあるチェリー先生は日本留学の経験を持ち、その講義は英語と日本語の入り混じった不思議な雰囲気でした。国際結婚や就業というテーマを通して、日本とフィリピンの関係を論じた講義は、男女格差や女性の地位向上について興味をもつ私にはとても参考になりました。

私たち二人は一昨年も別のプログラムでセブ島を訪れましたが、今回はまた違ったセブ島の姿を見ることができました。

日本百名山

川丸登山記

60歳からの山楽・湯楽・道楽

大野義孝 著

著者の山行記録集

山に魅了された

三度登頂達成

日本百名山をマイカ

大野

定価 240円

1冊 (本体)

発売

※お求めは書店または上毛新聞取り扱

走った... 登った...

トリップ

日本百名山

60歳からの山楽・湯楽・道楽